

ガキ大将を地で行く園長 保育一筋に悔いなし(1)

はっきり言って、この人の人生行路はシンプルだ。生まれも育ちも沖縄。36歳まで地元の保育園という小さな世界に身を置き、それ以降は香港の片隅で、キリスト教保育を実践する幼稚園の明かりを守り続けてきた。はじめは保育士として、のちに園長として。人生の持ち時間の大半は子どもたちと一緒にいた。家と園と教会。この3カ所を行ったり来たりしてきてただけの人生。並みの神経ではない。「たんぼ幼稚園のガキ大将です」と自称する園長、奥原益美さん(61)は「それでも悔いはまったくありません」。言葉から一人の沖縄人女性の心意気が伝わってくる。尋常ならざる情熱と信念はどこからくるのだろう。その源泉を探ろうと園長の個人史に分け入った。【大住昭】

香港に寄り添って生きる ～返還20周年企画～

人はそうシンプルには生きられない。あれもやりたい、これもやりたいと思い、あれもこれもやって試行錯誤を繰り返した末に、いまがあるのだろう。奥原さんはちがう。幼稚園の先生になろうと志したのは、沖縄での少女時代。幼稚園児だったころというから、初志貫徹にも年季が入っている。

1992年に香港に来てからはひたすら前を向き、走り続けてきた。あれっとな気がつく、なんとまあ、還暦を過ぎていた。そんな感じ。



「わたしのこれまでの人生ですかあ。そうですね、これはもう、ひと言で言えますよ。まったく悔いのない人生でした。これです。ウワッハッハ！」

沖縄がはじけた

日本人であるより先に沖縄人。初対面の印象は「沖縄がはじけた」感じ。三重丸の元気印。南方人特有のおおらかさがみなぎり、笑い声も半端じゃなくて、豪快だ。話の展開によっては、両手をたたき、足を踏みならし、上半身を揺らしながら腹から笑う。愛想笑いや作り笑いの要素はまったくない。

元気がさく裂する破顔一笑に、聞き手は最初のうち、「なんでそんなにおかしいのか」と勘ぐった。しかし、よく考えると、おかしさを体現するのに理由なんてない。そう思うと、あの笑顔も高笑いも自然に身についた奥原流なのだ気づく。奥原さんは40年余りに及ぶ保育の現場で、この流儀で子どもたちに接してきた。

沖縄に帰ってから数日過ごし、香港に戻ると、空港に着くやいなや、「ただいまあ～」の気分になる。奥原さんにとって、香港はまちがいなく第二の故郷になった。沖縄とはまったく異質の街の雑踏や人いさね。「それでも香港のほうがなんだか、落ち着きますね」

たんぼ幼稚園の玄関口の掲示板。卒園児やその保護者たちが顔を見せてくれたときの写真がたくさん飾られている。

卒園児一人一人にその後の人生があり、物語がある。人生をすごろくにたとえるなら、保育園や幼稚園の保育士は、園児の人生のほとんどふりだし時点からかわることができる。これは保育士冥利(みょうり)に尽きることだろう。奥原さんは感慨深そうに物語の一部を語ってくれたが、途中で言葉が途切れる。話しながら胸が熱くなったか。

「卒園児はいずれ日本に帰るでしょうけど、大きくなってまた香港に戻ってきて、その子どもたちがここに入園してくれる。親子2代の幼稚園になれば最高ですね」

言葉より実力行使

たんぼぼ幼稚園ではスタッフや園児、保護者からいつも「園長先生」と呼ばれる。実際の保育にも当たる園長先生は、園ではガキ大将だ。子どもが悪さやいたずらをする時、「そんなこと、してはいけません」と言葉で説明するよりも、場合によっては子どもがしたのと同じことをその子にする。「オレ様のほうがお前なんかより強いんだぞ」との無言の実力行使。えっと驚くその子に「どう、どんな気持ちがする」と聞き、別の子が受けた痛みをわかってもらおうとする。

保育で一番神経を使うのは、何と言っても園児の安全だ。けがをさせないように細心の注意を払っている。

うしろからいきなり押されると、前がコンクリートの壁などのときは危険この上ない。それでも子どもはやんちゃだ。押すのをおもしろがってやめない子どもには、奥原さんは先に安全を確かめておいてからその子に同じことをする。大人の園長先生がそんなことをするなんて。その子はびっくりして動揺する。

「ごめんごめん、いまどんな気持ち？」

「びっくりしたあ」

「ああ、よかった、わかってくれて。あの子があなたにそうされたときも、同じ気持ちになるんだよ」

「こわかった」

「そう。こわいのがわかっただけ、あの子にちゃんとあやまってきなさい」

悪さやいたずらを繰り返す子。その子には何を言っても無駄と諦めるのではなく、実力行使をしてもわからせる。わかってもらえると信じて指導している。

おもちゃ箱をひっくり返す子もいる。ほかの子どもたちが片づけようとする時、園長は「みんな、手伝わないで」とストップをかける。ひっくり返した子に片づけさせないと、また同じことをする。

「その子は何回もひっくり返し、そのたびに片づけさせられていると、次第に大変なのがわかってきます。それで自分からはもう、ひっくり返さなくなるんですね。保育には時間がかかります」

心を開く保育

子ども同士のケンカは、2人の意見や気持ちの行きがちがいから起きる。そうした時、すぐには止めない。2人の間に入って「こうしなさい」と指示するのは最悪の解決法。ケンカをしても見て見ぬふりをして、しばらくは放置する。

そのうち一人が泣きながらやってくる。「どうしたの」「〇〇ちゃんがこうしたあ」「そっかあ、じゃあ〇〇ちゃんに聞いてみよう」。2人の主張を辛抱強く聞きながら、時間をかけて仲裁する。

たんぼぼ幼稚園では奥原園長の方針もあって、「バカ」という言葉は禁句だ。親やきょうだい在家で何気なく口にする「バカ」は、園児にも自然と感染してしまう。とりわけ学期の途中から入ってくる園児は、ことあるごとに「バカ」を連発する。

園長はそのセリフを耳にするや、「この幼稚園にはバカはいません。みんな、愛されて生まれて、お利口に育っていますから」と言ってたしなめる。園長のそうした考えを知る年長の園児は、それを口にする子に「バカって言っちゃあ、いけないんだよ」と注意する。

「子どもたちはわたしがいやな顔をするのを知っているんで、わたしに聞こえないように小声でパーカと言っているかもしれませんけど。アッハッハ」

意図的に子どもを困惑させることもある。誰かが悪さをしたときなど、「こんなことをして、園長先生はうれしいよ」と言うと、子どもたちはポカンとした表情になる。「あっ、まちがった。ちがうちがう、悲しいよ」。そう言い直すと、悪さの張本人は「園長先生は怒っているんじゃないな」と思い、心を開いて話してくれるようになる。

「子どもはわかっているんですね、いけないことをしたことを。子どもは悪さやいじわるをしたことを反省するよりも、怒られることから自分の身を守ろうとします。だから肝心なのは、そんな心を開いてあげることだと思いますね」

場合によっては喜劇役者を演じながら、自分の考えを貫徹する。そんな園長のルーツは南の島、沖縄にある。生い立ちから見えていこう。



沖縄の与那原生まれ

昭和 31 年 (1956 年)、沖縄県島尻郡与那原町生まれ。沖縄本島の南部に位置する与那原町は、琉球王国時代から始まって 400 年以上の歴史を持つ大綱曳 (おおづなひき) の祭りでも有名だ。

母方の家族はアルゼンチンに移住。一人残った母親は、10 代で大阪に出て働いていたときに同郷の父親と出会う。両親は所帯を持ってから与那原に帰った。

父方の祖父母は地元で瓦工場をやっていた。父親は次男だったが、長男が戦死したため家督を継いだ。

最初に生まれた長男は生後 3 カ月で病死する。ついで奥原さんより 5 歳年上の長女が生まれ、次女が続いた。

「女ばかり」という祖父らの嘆き声を耳にしていた母親は、男の子を切望する。その願いがかなったか、つぎに授かった子だねはおなかの中で暴れまくる。長女や次女のとくとは明らかにちがう。これはもう、男の子にちがいない。母親や家族の期待を集めながら、家で助産師に取り上げられた子にはおちんちんがついていなかった。奥原さんだった。

三女は祖父母が大好き。朝起きると、祖父母の部屋に行き、三つ指をつきながら「おはようございます」とあいさつする。かわいがられたが、祖父母とも奥原さんが小さいときに他界してしまった。

敷地内の土は瓦の原料にされたため、自宅の建物は道

路より低かった。庭には芝生が敷かれ、ガジュマルの木が伸びている。子どものころはその木に登って遊ぶのが日課だった。

両親が別居する

父親には中国戦線での軍隊経験がある。ただ甘やかされて育ったせいか、仕事は何もせず、祖父母が残した財産を食いつぶすばかり。那覇の浮かれ街に足しげく通い、酒浸りになって女遊びにうつつを抜かしていた。

家計は火の車。母親は朝から晩まで、家族の食事の支度や洗濯に追われながら、瓦工場で身を粉にして働いた。しかし最後には音を上げてしまい、奥原さんが物心がつくかつかないかのころ、家を出てしまう。那覇で一人住まい。離婚ではなく別居だった。

母親の姿が家から消えてしまうと、三姉妹は自分たちで炊事や洗濯をするしかなかった。炊飯器はなく、まきでご飯を炊いた。おこげができる。ぱりぱりしたおこげが好きだった。

水道がなかった時代。水はつるべを何度も落としながら、井戸からくみ上げた。家には冷蔵庫がない。夏場はトマトやスイカを井戸の中に投げ入れておき、つるべで引き上げて食べる。冷えておいしかった。

母親が家を出てからは、父親の酒量は一段と増え、朝から酒が入る日もめずらしくなくなった。

父親は一時期、愛人を家に連れてきて住まわせていた。幼かった三女はその人を「ママ」と呼ぶ。ママが乗る自転車のうしろに座り、海水をくみに海岸まで行った記憶がある。ママはその海水で豆腐をつくった。

家に現金がなくなると、父親は「隣りから借りてこい」と娘たちに言いつける。瓦工場で営む隣家は裕福だった。「すみません、おカネ貸してください」と頭を下げにいくのは三女の役回り。子ども心につらくて仕方なかった。

保育士になりたい

家の近くにキリスト教会の付属幼稚園が開設されると、奥原さんは一期生として入園する。教会のシスターが保育士を兼務していたが、母親の愛情に飢えていた園児はシスターのやさしさに感化され、「大きくなったら幼稚園の先生になろう」と思った。

家から歩いて30分ほどの与那原小学校は、前方が入り江になっていたが、いまは埋め立てられている。通学路にはおじさんがたづなを握る馬車がゆっくり走っていた。帰り道は、おじさんの目を盗んでうしろからその馬車に乗る。見つかって「こらっ！」と怒鳴られると、飛び降りた。

そんな牧歌的な風景の中にいたが、小学校では楽しい思い出はほとんどない。運動会などがあっても酔っぱらいの父親には来てほしくなかった。生活保護の家庭だったので、配給されるお米や文房具などを受け取りに行かねばならない。それがたまらなくいやだった。

子どものころは瓦工場の近くの小川でよく遊んだ。高い山にはサトウキビ畑が広がっている。畑にはネズミが走り回っていたが、そのネズミを狙って毒蛇のハブが潜んでいる。サトウキビの収穫後、畑にはピンクの花が一斉に咲く。ムラサキカタバミで、畑でこれを摘んで花束などにして遊んだ。ハブにかまれたことはないが、危ない目には何度もあったはず、と当時を回想する。

宝塚より吉本に



沖縄の自宅の庭で。自分で縫った服を着ていた中学生のころ（奥原さん提供）

父親は軽蔑と憎悪の対象でしかなかった。その分、母親を美化するようになる。おしゃれな人で、自分で洋服をつくっていた母親は、いつしか「すてきなお母さん」となり、「会いたいなあ」との思いは募る一方だった。

いつだったか、那覇に住む母親がこっそりと与那原にやってきました。町の映画館で会った三姉妹は、母親からおそろいのクツを買ってもらおう。3人で大はしゃぎしたが、奥原さんが地元の与那原中学校へ通っていたとき、病弱だった次女が逝ってしまう。

中学生のころは宝塚のスターにあこがれた。歌も自分でつくったりしたが、夢見る乙女の心境を友だちに話すと、「あんたは宝塚より、吉本のほうがいいわよ」と言われた。

これにはがっかりするが、宝塚にあこがれるわりには恥ずかしがり屋。帰り道に同じ年頃の男子がいると、脇道によけて目を合わせないようにする。自信のない女子中学生だった。

「吉本のほうがいいわよ」と言われたのには、そのころの体形も一因していたか。中学生になると、隣家の瓦工場でのバイトに汗を流した。沖縄伝統の赤瓦はまず天日干しにする。完全に乾いてからかまどに入れて焼く。雨が降ると、干した瓦を急いで屋内に取り込むが、一枚だけでも重い。手と腰にずしりとくる。それを2枚重ねて運んだ。おかげで腕は筋肉もりもり。体つきもがっしりしてきた。

宝塚が駄目であれ、将来の進路ははっきりしていた。幼稚園児のときに決めた「幼稚園の先生」。これしかなかった。（続く）

おわびと訂正

本紙9月8日付に掲載した寺島洋一さんの記事(P16)の中で、写真説明に間違いがありました。「左が山崎さん、中央が脇崎さん」とありますが、正しくは「左が脇崎さん、中央が山崎さん」です。関係者の皆様にご迷惑をかけました。おわびして訂正します。